城北小

自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成

～学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫～

（３年計画の３年次）

校長　　高　谷　　信　行

１　研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「考えを表す子」「きたえる子」の徳・知・体の柱を掲げ、「学ぶ意欲」と「豊かな心」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、課題意識をもって主体的に学習に取り組み、他者と関わり合いながら協働的に学習を進め、自分の考えを深めていくことが必要になると考えた。

(2) 研究の経過から

昨年度は、魅力的な教材、よい発問などによって、児童に疑問や違和感、憧れ、興味などを抱かせ、「解決したい」「明らかにしたい」と思う「必要感のある課題設定」につなげる工夫を授業に盛り込んだ。また、児童を最後まで粘り強く学びに向かわせることができるよう、学習の進め方や学びのゴールをイメージさせる見通し、自分の学びを見つめさせる振り返りのさせ方についても研究してきた。その結果、友達の考えとのずれ、既習とのずれが生じ、それを解決するために考える必要感や問題を解きたい、実験をやってみたいという意欲をもたせることができた。加えて、課題を解決するための見通しをもたせたり、ワークシートや表などを工夫して予想されるつまずきに対して支援したりしたことによって、自信をもって課題に取り組ませることができた。しかし、児童を最後まで意欲的に課題に向かわせるためには、解決への見通しをもたせることが有効であると明らかになったものの、教師が積極的に支援をして見通しをもたせることが多かった。

そこで、今年度は児童の思考に寄り添い、適切に支援しながら、児童が課題の解決方法を見出していけるような指導方法について研究を進めてきた。ワークシートや表の工夫、実際に操作してみるなど、段階的に手立てを講じることによって、児童のやる気を持続させる工夫をした。また、子ども達に疑問や違和感、憧れ、興味などを抱かせ、「解決したい」「明らかにしたい」と思う「必要感のある課題設定」についても引き続き吟味し、子ども一人一人の問いにつなげられるよう実践を重ねた。

２　研究のねらい

自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育てるための指導の在り方を、授業実践を通して明らかにしていく。

３　研究仮説

課題設定や見通しのもたせ方、振り返りなどを工夫することによって、自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育成することができる

４　研究内容

○自分の考えをもち、主体的に学びに向かおうとする児童を育成するための効果的な指導の在り方

・課題設定の場面で課題を解決するための必要感や児童に問いをもたせる工夫

・児童の思考に寄り添い、解決できそうだと見通しをもたせる工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者・講師・授業の概要
７	２０	５学年　算数：「合同な図形」　　教諭　馬場　知里
		課題を提示してすぐと、ある程度話し合ってからの２回にわたって立場の表明を

		行うことによって、友達とのずれが生まれ、内角の和を求める必要感をもたせることができた。また、既習事項をふりかえりながら操作方法を全体で確認したことで、本時の活動の見通しにつながった。
９	７	中学年　国語：「アップとルーズで伝える」　　教諭　遠藤　彩華
		あらかじめ抜いてある２つの文章を提示し、どちらに入るのか問うことによって、自然と叙述に目が向き、子どもたちの解決したい意欲が高まった。また、文章カードをベン図の上に載せたり、ワークシートの上に載せたりと、自分の使いやすいように操作をさせることが、解決のヒントにつながり、自分の考えを整理することに役立った。
９	２１	低学年　国語：「馬のおもちゃの作り方」　　教諭　坂松　夢咲
		〈作り方〉ではない写真を１枚入れることで、本文に目が向き、必要感をもって重要な言葉や文を探し、意欲を持続させることができた。また、自力解決に入る前に文章中の写真を例に学級全体で確認したことによって、見通しをもって活動に取り組むことができた。
１０	１９	６学年　国語：「やまなし」　　教諭　山崎　孝太
		児童に題名を考えさせたことで、自分と宮沢賢治の考えの違いから、作者の思いを考えようとするきっかけをもたせることができた。また、５月と１２月を対比させ、似ているところを見つけさせたことで、教師側でねらっていた「命」という主題に迫るキーワードに気付かせることができた。

(2) 一般研修

月	日	一　般　研　修
５	１９	個別な配慮を要する児童の理解及びいじめ対応に関わる研修 担当：本校教諭　熊谷　恵美子　　小笠原　真一
５	２７	鉄棒運動～全員参加できる運動の素地について～ 講師：白山台小学校教諭　小向　一樹　先生
６	２２	問題解決的な授業づくりについて 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事
１２	１４	救急講習、校内での体制 担当：本校養護教諭　向田　菜都子

６　研究の成果

(1) 教材へのしかけや発問を工夫し、課題に対する興味を抱かせた後、ネームプレートや挙手などで立場の表明をさせたことにより、友達とのずれや自分とのずれが生じ、一人一人に問いを意識させ、必要感をもたせて課題解決に向かわせることにつながった。また、導入で課題意識をもたせたことで、その後の学習過程においても意欲を持続させ、学びに向かわせることができた。

(2) ワークシートや思考ツールなどを工夫することで、子どもたちの思考を整理し、ねらいを焦点化することができた。また、様々な手立てとして実際の操作や文章へのしかけ、全体でやり方を確認するなどを段階的に講じた。それによって、自信をもって課題に取り組み、子どもの思考を活性化させることができた。

７　研究の課題

(1) 問題解決に向かう必要感・切実感をより高めるためには、立場の表明を複数回行い、考えを焦点化することが必要であると明らかになった。しかし、考えを広げたり深めたりする発問については検討していく必要がある。

(2) 児童の思考に寄り添うには、児童一人一人に応じた工夫や手立てが必要である。また、教師が子どもの思考を促すことで、対話が生まれ、解決の見通しをもつことへとつながるため、今後も引き続き研究していく必要がある。

（記入者　　馬場　知里）